國學院大學研究開発推進機構ニュース

Vol.18 No.1
発行人　笹生　衛
編集人　渡邉　卓
〒150-8440　東京都渋谷区東4丁目10番28号
電話（03）5466－0104
FAX（03）5466－9237

事業

美しい伊豆創造センターとの包括連携協定

吉永博彰

この度、國學院大學は、本研究開発推進機構を窓口として、一般社団法人美しい伊豆創造センター（略称：美伊豆）と令和6年4月1日付で包括連携に関する協定を締結することとなった。同センターは、静岡県東部の伊豆半島に位置する13の市町（7市6町）を設立時社員（正会員）とし、13市町が共同して策定した伊豆半島グランドデザインの推進を目的に、平成29年に設立された団体である。

伊豆半島の形成はフィリピン海プレートの海底火山群の活動に由来するとされ、プレートの境界付近に位置する。そのため、火山活動に由来した豊かな自然環境や景勝地に恵まれ、歴史の舞台や文化遺産、観光施設も多く、観光業が盛んな地域である。本学でも伊豆地域を対象とした長年にわたる研究成果・実績を蓄積しており、重要な研究フィールドの一つといえる。

令和4年4月、同センターは伊豆半島ジオパーク（日本ジオパークおよびユネスコ世界ジオパークに認定）を運営する伊豆半島ジオパーク推進協議会と統合した。ジオパークは、地質学や環境学などの地球科学的にみて価値や意義のあるサイト（場所）・景観が、「保護」「教育」「持続可能な開発」が一体となった概念（考え方）によって管理されたエリア（地域）のことである。

現在は、世界から称賛され続ける地域づくりと伊豆半島全体の持続的な発展に貢献することを目的に、13市町ほか各市町の観光協会や商工会をはじめ、公共交通機関や文化・観光施設、地域報道機関、事業者組合・地域企業等の正会員を中心に、多くの賛助会員が参画する。同地域の持続可能な観光と雇用創出および地域活性化を柱に、「伊豆半島地域の大地の遺産とそれに由来する自然・文化遺産を保全、研究及び活用する事業」や、「伊豆半島地域の自然・文化・歴史・産業等の情報収集及び情報発信に関する事業」ほかを推進している。

その一環として、國學院大學博物館と令和五年度に連携協定を結び、特別展「三嶋の神のモノガタリ―焼き出された伊豆の島々―」を軸とした展示および関連事業の実施に至る。本機構も地域と連携する形で、本学の研究成果の蓄積や知見を活用する機会を得た（本誌17－2号の10・11頁参照）。そうした連携事業の実績を基に、伊豆地域を対象とした学際的な研究の推進と理解の促進を一層図るため、この度の協定締結の運びとなったのである。

このような地域連携協定に基づく関連事業・催事の企画推進や研究成果・情報の共有、人的交流などを通じて、本学が伊豆半島の歴史文化遺産の保全・活用や地域の課題解決ほかの社会活動に貢献・寄与するとともに、さらなる研究開発・推進ならびに国内外への研究成果の公開・発信等が期待される。

目次

事業
美しい伊豆創造センターとの包括連携協定　吉永博彰…1
令和5年度研究事業成果報告
日本文化研究所　宗教文化研究と学術情報発信の推進　星野靖二…2
学術資料センター（考古学資料館部門）事業　深澤太郎…3
学術資料センター（神道資料館部門）事業　大東敬明…4
校史・学術資産研究センター事業　渡邉　卓…5
研究開発推進センター　研究事業「神道・日本文化の先端的研究」　宮本誉士・新井大祐・木村大樹…6
研究開発推進センター「〈SDGs〉と建学の精神」研究事業　宮本誉士…7
研究開発推進センター　國學院大學「古典文化学」の創出研究事業　渡邉　卓…8
國學院大學博物館事業　深澤太郎・佐々木理良・尾上周平…9・10
調査研究
福島県白河市建鉾山遺跡3次元測量調査概報　深澤太郎・小槻賢志・篠田浩輔…11
情報発信
デジタルミュージアムの現状と課題　及川　聡…12
彙報　…13
人事一覧　…14・15
資料紹介
坪井洋文博士資料にみる伊豆諸島の民俗調査　川嶋麗華…16

令和５年度研究事業成果報告　日本文化研究所

宗教文化研究と学術情報発信の推進

星野靖二

一、研究事業の概要

本事業では、本学の日本の宗教文化に関する学術情報を、研究を進めて更に蓄積し、公開を念頭に置いて整理・拡充していく。かつ、英語化・多言語化に可能な限り対応して、これを国内および国際的にも発信していく。これらを円滑に行うための体制作りを行い、今後の事業に接続させる。具体的には以下のような事業を推進していく。

（1）「学術情報の研究・整理・拡充」

ⅰ）学術情報の一覧化・電子化：旧日本文化研究所と21世紀ＣＯＥプログラムにおいて蓄積されてきた日本の宗教文化に関する学術情報について整理・電子化を進める。本学図書館に所蔵されている近代の神道・国学関連雑誌の調査を進める。優先度の高い重要な資料について、電子化を行う。

ⅱ）学術情報の公開に向けた連絡・調整：著作権の処理を含めて、原著者から公開許可を得るための適切な手続きを構築し、公開を可能にするための連絡・調整作業を行う。本学機関リポジトリへの登録も視野に入れる。

ⅲ）研究の推進と宗教文化教育の教材開発への展開：霊魂観・死生観に焦点を合わせ、現地調査を行いながら、日本の宗教文化に関する研究を進める。学術情報の公開・発信に関連して、より公益に資することを念頭に置いて、宗教文化教育の教材開発へと展開させていく。

（2）「学術情報の国際発信」

ⅰ）デジタル・ミュージアムとの連携：本学諸機関と連携してデジタル・ミュージアムの運営を推進する。またEncyclopedia of Shintoなど既にデジタル・ミュージアム上で公開している学術情報を拡充していく。

ⅱ）ウェブ上での情報発信：ウェブサイト、ＳＮＳなど各種媒体を活用して学術情報の発信を推進していく。Shinto Portalサイトに神道についての英語の情報を集約していく。

ⅲ）国内外の研究者・研究機関との交流・連携：日本の宗教文化研究に関わる研究者・機関について情報を集積し、交流・連携を図る。英語圏の研究者と協力して、研究成果を英語化して発表する。

ⅳ）研究成果発信のための催事の開催：定期的に研究会を開催し、本事業の研究成果を広く発信し、また外部から講師を招いて知見を深め、事業のより円滑な推進につなげる。

二、令和５年度の研究事業成果

主催催事として12月17日に国際研究フォーラム「見られることで何が変わるのか―ツーリズムと宗教文化―」を開催した。

（1）-ⅰについて、旧日本文化研究所刊行物を中心にデジタル化、整理を行った。美保関神社横山家文書マイクロフィルムの未電子化分75巻を、機構予算からも支出して電子化を終えた。昭和30年代前半に開催されていた神道・日本宗教を主題とした研究会「盲点の会」について、現存している11回分の記録をデジタル化し、翻刻と参加者の履歴調査を進めた。本学図書館収蔵近代宗教雑誌の調査について、『河野省三博士記念文庫目録（洋装本の部）』のデータ化を行い、また『惟神道』『幽顕』『国民礼研究会会報』誌等の目次作成を進めた。

（1）-ⅱについて、著作者と著作の照合作業に必要となる旧日本文化研究所の『紀要』『所報』の著作者情報と目次情報の更新作業を行い、500名弱の照合をほぼ完成させた。

（1）-ⅲについて、特に三宅島をフィールドとして、霊魂観と死生観についての調査・研究を進めた。日本の宗教文化についての研究成果として、『年報』16号において、研究員・共同研究員による論文を３本、研究ノートを３本刊行した。神道文化学部のＦＤ企画と連携して、宗教文化教育の授業研究会を２回共催し、写真撮影のワークショップを１回共催した。

（2）-ⅰ・ⅱについて、Encyclopedia of ShintoやBasic Terms of Shintoなどのデータベース、またポータルサイトであるShinto Portalについて、情報の更新などを行って運用した。研究所のウェブサイト、各種ＳＮＳを通じて情報発信を行った。

（2）-ⅲについて、ヨーロッパ日本研究協会の国際会議において、平藤喜久子所長がエリック・シッケタンツ氏（兼担教員・神道文化学部准教授）、矢崎早枝子氏（共同研究員・グラスゴー大学教授）らと共にパネルを企画して発表した。East Asian Network for The Academic Study of Esotericismと協力して英語によるワークショップを共催した。東大先端研創発戦略研究オープンラボと協力してシンポジウム「神に何を奉るか―ケルトと日本―」を共催した。*Kokugakuin Japan Studies*第５号において、本学教員の研究論文を３本英訳して刊行した。

（2）-ⅳについて、国際研究フォーラム「見られることで何が変わるのか―ツーリズムと宗教文化―」を開催した。公開の研究会である日本文化研究所研究会を６回開催した（第１回：６月28日、藤井修平（ＰＤ研究員）による発表。以下同様。第２回：７月３日、川嶋麗華（助教（特別専任））。第３回：９月13日、髙田彩（ＰＤ研究員）。第４回：２月28日、問芝志保（共同研究員・東北大学准教授）。第５回：３月12日、長谷川香（東京藝術大学講師）・武井謙悟（ＰＤ研究員）、コメント：大道晴香（神道文化学部助教）。第６回：３月29日、牧田小有玲（研究補助員））。

令和５年度研究事業成果報告　学術資料センター考古学資料館部門

学術資料センター（考古学資料館部門）事業

深澤太郎

一、研究事業の概要

当部門は、日本文化の形成過程と、その特質を明らかにするために次の事業を推進し、國學院大學博物館における展示・出版・デジタルミュージアムなどを通して研究成果を公開する。

（1）考古・民俗資料の調査研究

旧考古学資料館から継続してきた基幹事業であり、考古・民俗資料の収集・整理保管と、調査研究機能を担う。特に、収蔵資料の再整理・資料化を進めつつ、『収蔵品目録』の整備を図る。

（2）歴史資料の調査研究

旧伝統文化リサーチセンター後継事業であり、博物館における歴史資料の収集・整理保管と、調査研究機能を担う。ここでは、主に考古学・民俗学関係アーカイブの資料化を推進する。

（3）学術資料のデジタル化と公開

旧日本文化研究所学術フロンティア後継事業であり、事業1・2にて再整理した博物館収蔵資料のデジタル化・公開と、事業2にて取り扱っている劣化画像の再生活用・公開を実施する。

（4）祭祀遺跡・祭礼等の調査研究

事業1～3と協働しつつ、本学関係者が調査してきた考古学的遺跡の再評価や、祭祀祭礼をはじめとする民俗記録の再検証を試みるため、現地関係機関等と連携したフィールドワークを行う。

（5）学芸職実践教育

当部門の事業・研修に、研究員等・臨時雇員を参画させ、次代の学芸研究職員を育成する。

二、令和５年度の研究事業成果

（1）考古・民俗資料の調査研究

計画的に資料の収集・整理を進め、昭和３（1926）年の考古学標本室創立時から運用してきた『列品台帳』をもとに、『収蔵品総目録』を整備。特筆すべき成果には、千葉県市川市曽谷貝塚出土資料の再整理と、出土人骨の理化学的な検討がある。故乙益重隆名誉教授が調査した長崎県南島原市山ノ寺梶木遺跡出土資料についても、発掘地点が同定できた。また、民具台帳の再検討も進めている。加えて、『三嶋の神のモノガタリ』『榧園好古図譜』『蒙古襲来』展に備えた調査を行うとともに、武蔵根岸家所蔵蒙古襲来絵詞の研究などを推進。収集資料としては、群馬県藤岡市白石古墳群出土石製模造品一括がある。石井昌国旧蔵大刀形埴輪については、修理に伴う解体を実施した。

（2）歴史資料の調査研究

「柴田常恵野帳資料」のうち、韓国編の翻刻を開始。少年時代の大場磐雄が編んだ同人考古学雑誌『いそのかみ』については、些か翻刻作業が遅れており、大場の高弟である茂木雅博客員教授の校閲が未了となっているため、令和６（2024）年度に刊行を延期する。『漢代物質文化資料図説』の翻訳刊行も、原著者である孫機中国国家博物館終身研究館員の逝去に伴い進捗に遅れが生じている。なお、来る令和10（2028）年度の博物館創立100周年に向けて、館史資料の収集を継続して推進しており、下津谷達男元國學院大學栃木短期大学教授の聞き取りなども実施した。

（3）学術資料のデジタル化と公開

「國學院大學博物館収蔵資料総目録（考古）」「社寺等絵葉書資料」に加え、研究者個人資料のデータベース化を進めてきた。令和５年度は、「社寺等絵葉書資料」16,096点の整理が完了し、デジタルミュージアム（DM）における公開を待つばかりとなっている。考古学分野の「大場磐雄写真資料」の35㎜フィルムが排列順に錯誤を来していたため、4277点の再整理を実施してメタデータの点検に作業を進めた。民俗分野では、「坪井洋文写真資料」の35㎜リバーサルフィルム3861点のスキャンを完了。「櫻井満写真資料」34冊・「斉藤ミチ子写真資料」35冊のメタデータ整理を進めた。また、「内田長志動画資料」691点についても、目録を作成する段階まで至った。なお、「國學院大學博物館収蔵資料総目録（考古）」については、DMでの一部公開を開始しており、令和８（2026）年度の整備完了を期したい。

（4）祭祀遺跡・祭礼等の調査研究

「伊豆地域の宗教考古学的研究」と、特別展「三嶋の神のモノガタリ」の関連事業として、伊豆半島・伊豆諸島の資料調査を実施。東京都三宅村においては、壬生友子共同研究員の協力を得て、橋本裕之客員教授・佐々木聖佳甲南大学講師と共に、中世考古資料の同時代的民族誌となり得る芸能・歌謡の現地調査を推進したほか、都の文化財ウイークに合わせて島役所・薬師堂の現地解説にも赴いた。また、二木泰史共同研究員の指導により、西伊豆地域におけるやぐら・石造物を対象とした３次元計測の予備調査を開始。「神社境内祭祀遺跡の研究」では、福島県白河市と共同で建鉾山遺跡高木地区の３次元測量を行い、鈴木功文化財専門研究員による指導の下、将来的な国史跡指定へ向けた取り組みにも参与した。

（5）学芸職実践教育

例年実施している埋蔵文化財調査研修は、山梨県埋蔵文化財センターの協力と、久保田健太郎副主査・文化財主事の指導を受け、都留市中谷遺跡の調査（令和６年３月）に４名を受け入れて頂いた。また、研究員等・臨時雇員のうち、考古班９名が國學院大學考古学研究室・千葉県教育委員会・神奈川県教育委員会・神奈川県埋蔵文化財センター・府中市教育委員会・香取市教育委員会・八戸市教育委員会（２名）・津南町教育委員会、民俗班２名が新潟県立歴史博物館・川崎市民ミュージアムに採用されるなど、事業推進に伴う実践的な教育効果も大いに実を挙げている。

令和５年度研究事業成果報告　学術資料センター神道資料館部門

学術資料センター（神道資料館部門）事業

大東敬明

一、研究事業の概要

学術資料センター（神道資料館部門）事業は、本部門が所管する学術資料の整理・保存・研究をすすめ、研究・教育に活用できる体制を整えること、あわせて本学が所蔵する神道に関わる資料及び神道史の研究を進めることを目的とする。この成果は、國學院大學博物館での展示、本部門の刊行物、國學院大學博物館Online Museumを通して公開する。

（1）所管資料の整理・保存・研究

本部門が所管してきた資料の整理・保存・研究を継続するとともに、本学が所蔵する宮地直一・西田長男両博士旧蔵資料をはじめとする諸資料群の整理・調査を行い、本学の研究・教育・展示などに適切に対応できる体制を整える。

（2）神道史研究の推進

（1）で得られた情報をもとに、本学の学術資料を活用しつつ、神社史、祭祀・祭礼史を中心に、神道史を再検討し、さらに教育へと反映させる。

（3）研究成果の公開

（1）（2）で得られた成果は、本部門の刊行物、國學院大學博物館における展示、國學院大學博物館Online Museumで公開する。

二、令和５年度の研究事業成果

（1）所管資料の整理・保存・研究

令和４年度より取り組み始めた高倉家旧蔵資料の再整理・調査を継続し、令和５年度末に完了した。本調査には、田中潤（本機構共同研究員、学習院大学史料館研究員）とともに行ったもので、今後は、控裂（ひかえぎれ）の保存に取り組んでいく予定である。この中で、未整理であった文書類についても目録化した。成果公開として、國學院大學博物館において、特集展示「和の装い―神職装束とお雛さま―」（令和６年２月17日～３月17日）を実施した。

その他、本部門が所管する資料のうち、引札の調査を進め、「めでたい正月引札」（令和６年１月６日～２月12日）を行った（後述）。西田長男旧蔵資料については、令和２年の受け入れ以来、進めてきた整理による知見をもとに、特集展示「西田長男博士旧蔵資料―資料と研究―」（令和６年３月19日～５月26日）を実施した。

（2）神道史研究の推進

これまで、本部門では、神社の祭祀に用いられる祭具の研究を進めてきた。これは神道信仰の中核には、神祇に対する祭祀があり、その中で祭祀に用いられる要具の展開は、重要な研究対象だと考えるためである。令和５年度は、それらの研究成果をまとめ、『祭具』を刊行した。同書には、「ごあいさつ」（笹生衛）、「現代祭祀の次第の中での要具―大祭式（例祭）の次第を通して―」（鈴木聡子）、「神社祭祀にみた要具の解説」（吉永博彰）、コラム「『延喜式』にみる祭祀と祭料」（木村大樹）、同「民俗祭祀の中の祭具 しめ縄の歴史と民俗」（水谷類）を収めた。

また、令和２年度より研究・作業を進めてきた、「『延喜式』祭祀関連条文集成」を本学デジタルミュージアムにおいて公開した。本研究については本誌17－２号に木村大樹氏による報告がある。『延喜式』をめぐる研究は、同データベースの拡充を含め、宮地直一・西田長男博士旧蔵資料をはじめとする本学所蔵資料を活用しつつ、研究開発推進機構内諸機関等と連携しながら今後も進める。なお、令和９年度の撰上1100年に、その成果を踏まえた企画展を行う予定である。

（3）研究成果の公開

令和５年度は、國學院大學博物館において、左記の展示などを行った。

特別展
・「三嶋の神のモノガタリ―焼き出された伊豆の島々―」（令和５年９月23日～11月19日）

企画展
・「祓―儀礼と思想―」（令和５年５月20日～７月９日）

特集展示
・「和の装い―神職装束とお雛さま―」（前掲）
・「西田長男博士旧蔵資料―資料と研究―」（前掲）

その他（季節の展示など）
・「倭姫命と神道思想―伊勢神宮のはじまりの物語―」（令和５年11月25日～12月25日）
・「めでたい正月引札」（前掲）

このうち、「三嶋の神のモノガタリ」については、本誌17－２号に吉永博彰氏による報告が、「祓」については、同17－１号に大東による報告がある。

「めでたい正月引札」は、髙橋あかね氏（研究補助員）・大胡友暉氏（臨時雇員）・高夢雨氏（同）が中心となって進めたものである。引札は、商店が客引などを目的として無料で頒布した刷り物である。特に年末年始に頒布されたものは、「正月引札」と呼ばれ、福神や富士など、縁起の良いものが描かれた。また、文明開化や日露戦争といった時代背景を反映させた画題などが取り入れられたものもある。主な展示資料は、「金庫から運を出す恵比寿・大黒開運の図」（明治時代、滋賀県）、「硬貨を車輪にした自転車に乗る恵比寿・大黒」（明治時代ごろ、大阪府）、「心を磨く恵比寿・大黒」（明治41年〈1908〉）であり、「硬貨を車輪にした自転車に乗る恵比寿・大黒」には恵比寿・大黒が、硬貨を車輪にし、珊瑚、鈎、巻物などの宝物で作られた自転車に乗る様子が描かれる。

なお、このほか、特集展示「和の装い」で展示した女性神職装束の着装等を青木里紗氏（臨時雇員）が担当するなど、本部門では、研究員・臨時雇員が専任教員とともに展示実務に携わる機会を作ることにより、若手の育成にも力を入れている。

令和５年度研究事業成果報告　校史・学術資産研究センター

校史・学術資産研究センター事業

渡邉　卓

一、研究事業の概要

本センターは、國學院大學の歴史及び本学の学術資産に関する研究を行い、その成果を博物館の展示や本センターの機関誌等での発表を通じて公開・発信することにより、広く社会に還元することを目的に、主に校史研究部門と学術資産研究部門とで構成される。

（1）校史についての調査・研究

学内外からの校史・学術資産に関する問い合わせへの対応や創立140周年を迎えたことを踏まえた自校史教育用テキストの改訂などに取り組む。テキストについては「國學院科目」（「國學院大學の歴史」）等の学部教育で活用する。また学内の自校史に関する研修等にも従事する。

（2）学術資産についての調査・研究

本学図書館所蔵の貴重資料をはじめとした学術資産の調査・研究に取り組み、具体的に活用していくための体制の整備を行う。他方においては、それら知見を図書館ホームページ上のデジタルライブラリーの解題として公開することなどを通じ、その成果と学術的価値の学内外への発信に寄与する。

（3）校史関連資料のデジタル化

本センターが所蔵する校史資料を中心とした学術資産の学内用データベースの構築を視野に入れた、基礎データ整備につとめる。同じく本センター所蔵資料のうち資料保存・公開の観点から意義を見込めるものに優先度をつけ、所管資料のデジタル化を進める。

（4）『学校法人國學院大學　中期５ヵ年計画』との連係

校史資料を中心とした学術資産の調査・研究、学内用データベースの整備、あるいは博物館における校史・学術資産関連資料の展示作業などは、「【戦略３】建学の精神に基づく、日本を学ぶ体系的なカリキュラムや研究を推進する環境の整備」のうち、〔『國學院大學150年史』に関する検討〕に対応出来る体制の整備と、〔ＤＸ等を活用した研究成果・学術資産の活用と公開・発信環境の整備〕に深く関わる。

（5）事業成果の公開・発信

本センターの事業を通じて得られた新たな知見や研究の成果は、博物館における展示や機関誌『國學院大學 校史・学術資産研究』『校史』を始めとした各種学術雑誌などでの発表を通じて学内外への公開・発信につとめる。

二、令和５年度の研究事業成果

（1）校史についての調査・研究

校史研究部門では、学内での自校史教育・普及のいっそうの推進および将来的な大学史の編纂を見込んで、國學院大學の歴史にかんする図録ないし小冊子の編纂を計画し、その執筆に向けた資料の調査・研究に従事した。校史資料の整理に際しては、研究員・臨時雇員を中心に1550点の資料整理（目録化）と約300点の写真資料・ネガフィルム・ガラス乾板などのスキャニング作業を進めた。また令和５（2023）年は関東大震災の発災および渋谷校地への移転から100年目の年にあたったことから、関連する校史資料の調査・研究を始めとして、本センター教員の公開講座への登壇（「第48回日本文化を知る講座」）、機関刊行物で取り上げるなど、積極的に学校史の発信に努めた。とくに関東大震災・渋谷校地移転関連資料の調査は、『学校法人國學院大學　中期５ヵ年計画』の「【戦略３】建学の精神に基づく、日本を学ぶ体系的なカリキュラムや研究を推進する環境の整備」（以下【戦略３】と略）のうち、〔『國學院大學150年史』の検討に対応出来る体制の整備〕にも深く関わるものとなった。なお、過年度と同様に学内外から寄せられる校史や学術資産に関する問い合わせに対応をおこなうとともに、学内の自校史に関する各種教職員研修にも従事した。

（2）学術資産についての調査・研究

学術資産研究部門においては、本学図書館所蔵の貴重資料をはじめとする学術資産の調査・研究に取り組み、図書館ホームページのデジタルライブラリー上で解題を公開することを通じ、その成果と資料の学術的価値の学内外への発信に努めた。また【戦略３】のうち〔ＤＸを利用した研究成果・学術資産の活用と公開・発信のための環境の整備〕を念頭に、デジタルミュージアム上に新たに本学図書館が所蔵する歴史的古文書の検索とデジタルライブラリー所載の高精細画像へとリンク可能な「所蔵古文書データベース」を構築した。それと並行して、本学図書館所蔵の神道史・神社史関連の史料群『吉田家文書』の教育・研究への活用に向け、当該史料の講読および翻刻を進めた。なお、毎年本学図書館との協働のもとで進めているデジタルライブラリーへの書誌・解題の作成は、上記データベースの構築と史料翻刻作業の進捗を踏まえ、『吉田家文書』を中心として今年度の作業を進めた。

（3）校史関連資料のデジタル化

本センター所蔵資料のデジタル化については、オープンリール（「若木が丘の青春」「國學院大學」「日本のこころ」「本気でやる」）を主として資料保存の観点上緊急性を要するものについて、その作業を進めた。

（4）『学校法人國學院大學　中期５ヵ年計画』との連係

（それぞれ（1）（2）において既述）。

（5）事業成果の公開・発信

事業を通じて得られた新たな知見や研究の成果は、博物館での展示（「〈春の特別列品〉土御門家がみた宇宙」会期：自令和５年４月１日至令和５年５月14日）や機関誌である『國學院大學 校史・学術資産研究』『校史』を始め各種学術雑誌等での発表を通じて公開・発信をおこなった。そのほか広報課とも協力し、『國學院大學学報』の〔学問の道〕のコーナーを通じて大学の学問の歴史にかかわる連載をおこない、大学ホームページ上でも公開し、広く社会への情報の発信・普及につとめた。

令和５年度研究事業成果報告　研究開発推進センター

研究開発推進センター研究事業「神道・日本文化の先端的研究」

宮本誉士・新井大祐・木村大樹

一、研究事業の概要

本事業は、学校法人國學院大學中期５カ年計画に従い、これまで実施してきた本センターの研究事業をさらに発展させるべく、新たな国学的研究による拠点機能の拡充を目指して次の①～⑥の事業を推進する。なお、本事業は院友神職会をはじめとする神社界からの指定寄附金に基づく研究事業として実施するものである。

①「神道・日本文化の先端的研究」推進のための学際的・国際的研究のハブとなる拠点構築

神道・日本文化研究を推進してきた研究機関・組織との連携を図りながら、本学及び本機構が学際的・国際的研究のハブとなる拠点構築のための研究交流を行う。また、機構各機関の研究事業と連携した以下の諸業務を実施する。

②近年の研究の概括と課題抽出

近年の神道・日本文化に関する研究業績の概括、論点や課題の抽出により、研究の基盤構築を行う。

③基礎資料の作成

④関係資料の調査・保存・活用

基礎資料の作成を行うとともに、本学図書館や機構等で所蔵する神道・日本文化関連資料の調査、撮影・保存・活用を行う。

⑤研究開発推進センター研究会の企画・運営

センター研究会の企画・運営を中心に、若手を含めた多彩な研究者を招いた研究会を定期的に開催することにより、学会や学外研究機関などとの連携を行う。

⑥研究開発推進センター研究紀要等の刊行物による研究成果の社会発信

『研究開発推進センター研究紀要』第18号の編集・刊行作業を中心に、成果公開を行う。

二、令和５年度の研究事業成果

本事業の２年目にあたる令和５年度は、次に掲げる研究事業を主に実施した（該当する上記業務の番号を付した）。

（１）神社本庁総合研究所との連携による業務

基礎資料の作成として、神社本庁総合研究所と連携し、令和４年度からデータ編集及び校正作業に携わってきた『皇国時報』総目次』の刊行（③⑥）、『明治期神社法令史料集成（仮）』の基盤データの作成作業を実施した（③）。また、研究協力に係る作業内容について、二度の協議を行い、進捗状況の確認、今後の方途について検討を行った（①）。具体的な作業については、主に神社本庁指定寄附金に基づく臨時雇員が中心的に携わった。

（２）資料の調査・活用

令和３・４年度に労務委託により整理・リスト化した「近代神社社格昇格関係資料」群の撮影作業、及び近代社格の制度運用実態に関する分析を行った（③④）。作業・分析の進捗については、令和６年５月に内部検討会で報告を行い、神社をめぐる制度の通史的考察の中での活用方法を検討した（②）。

また、本学図書館が所蔵する「宮地直一コレクション（和装本）」の調査を行い（④）、とくに善本や貴重な古写本、さらに神道研究上重要と考えられる資料の一部については解題（計11本）を作成して紀要に掲載した（⑥）。このうち、吉田神道関係の資料については、学術資料センター（神道資料館部門）主催の研究会にて調査概要の報告を行った。

（３）センター研究会の開催

神社・神道の実態解明に向け、とくに近世の「由緒記」形成のプロセスに焦点を当てて近世の学知と諸社の活動実態を検討するため、学外の若手研究者を招いて機構内研究会「近世期における学知と諸社の活動」を開催した（②⑤）（令和６年１月20日〈土〉、オンライン開催。22名参加）。なお、研究会の概要は、『機構ニュース』17－２号〈令和６年２月〉に報告済である。

また、令和15年（2033）の神宮式年遷宮を視野に、今後の本機構を中心とする学内の神宮に関する研究、及びこれを軸とした皇學館大学との活発な研究交流を進展させていくため、その一歩となる研究会「伊勢神宮古代・中世移行期論の射程」を神道宗教学会との共催により開催した（令和６年２月22日〈木〉、ハイブリッド開催）。研究会には、皇學館大学研究開発推進センターから若手教員２名を招聘し、本学教員と併せて計４名が登壇した（①⑤）。当日は対面・オンライン併せて64名（登壇者・運営含む）が参加した。当日の記録については令和６年度の刊行物上で公開する（⑥）。

上記の両研究会については、今年度以降も関連の研究会を継続して開催する予定である。

（４）定期刊行物の刊行

『研究開発推進センター研究紀要』第18号を刊行し、構成員による論文、資料解題、講義記録、公開講座記録、彙報を収載した（⑥）。

（５）その他

國學院大學博物館企画展「祓―儀礼と思想―」（令和５年５月～７月）の開催にあたり、学術資料センター（神道資料館部門）のマネジメントのもと、本センターの教員・研究員が資料の調査を行い、図録や展示キャプションの一部執筆・作成に協力した（④）。

また、令和元年度より進めてきた乃木神社との研究協力における成果の一環として『乃木神社御鎮座之記』を執筆・編集し（⑥）、あわせて刊行記念講演会を乃木神社との共催により実施した（令和６年３月24日〈日〉）。

令和５年度研究事業成果報告　研究開発推進センター

「〈ＳＤＧｓ〉と建学の精神」研究事業

宮本誉士

一、研究事業の概要

本事業は、学校法人國學院大學中期五カ年計画に従い、本センターが推進してきた「渋谷学」等の研究成果を再構成し、「ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）」を建学の精神から考察する研究を中核として推進する。また、その研究成果、さらに本学における様々な取り組みも含めて、ＳＤＧｓに関連づけて社会へ発信し、それらを本学の教育活動、社会貢献・地域連携へと展開させる方途を検討する。これにより、「共生社会を創り出す人材の輩出」に研究面から寄与することを目指すとともに、研究成果を社会へ還元するべく、以下の①～⑤の事業に取り組む。

①建学の精神から「ＳＤＧｓ」を考える理論的な研究を推進する。

②学内における取り組みを集約するためのプラットフォーム（ワーキンググループ等を含む）構築を目指し、学内の連携を行う。

③これまでの研究成果を再構築し、学外協定等を加味して、社会貢献・地域連携に積極的に活用する方途を模索する。

④「ＳＤＧｓ」と関連する社会的問題についての研究を行い、広く社会貢献・地域連携に資するプロジェクトを構想する。

⑤上記①から④の研究成果を学部教育に還元する。

二、令和５年度の研究事業成果

本事業の２年目にあたる令和５年度は、次に掲げる研究事業を主に実施した（該当する上記事業の番号を付した）。

（１）関連授業の実施

本事業の一環として実施するオムニバス授業（①～⑤）として、（一）「共存・共生の思想（持続可能な社会を目指して）」（令和５年度前期・300名受講）、（二）「國學院の学び（渋谷学）」（令和５年度後期・73名受講）、（三）「共存・共生の思想（持続可能な社会への取り組み）」（令和５年度後期・99名受講）の、計３コマのＳＤＧｓに関わる講義をマネジメントした。（一）では、各回講義で関連するＳＤＧｓのゴール・ターゲットを示し、世界の諸課題とＳＤＧｓとの関連性を考える授業（ＦＤ活動として事前・事後打合せ、検討会をマネジメント）、（二）では、渋谷とＳＤＧｓとの関連性を考える講義が実施された。令和５年度より開講した（三）では、学外より認定ＮＰＯ法人開発教育協会（ＤＥＡＲ）、渋谷区男女平等・ダイバーシティセンター（アイリス）〈Ｓ・ＳＡＰ協定による連携〉、ボッシュ株式会社、一般社団法人第二のふるさと創生協会、シブヤサステナブル推進協議会（以下、「シブサス」）（「渋谷区環境基本計画2023」のリーディングプロジェクトに掲げられた取り組み）の関係者を講師として招き、講義内容に関する課題をもとに毎回ディスカッションを行い、ＳＤＧｓを学生が主体的に考える授業が展開された。なお、（一）（二）には、令和５年度の授業から、全学的な取り組みと関連させるため、人間開発学部・観光まちづくり学部の教員も講師として参画している。

（２）関連文献の調査と文献目録の作成

ＳＤＧｓの理論的研究（①）の基盤となる資料作成を目途に、日本・世界の諸課題とＳＤＧｓとの関連性を具体的に検討するべく、本事業に参画する研究員・臨時雇員を中心として、「ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）」・「ＭＤＧｓ（ミレニアム開発目標）」・気候変動・ジェンダー平等・人間の安全保障等をキーワードとする関連文献の調査、文献目録の基盤データの作成作業を実施した。

（３）第二回「しぶカフェ」の実施

学内事務部局との連携（②）、社会貢献・地域連携（③・④）を視野に入れながら、渋谷区の環境問題に関わるシブサスのメンバーを招き、「第二回「しぶカフェ」渋谷の落書きとアートのあいだ～「仕事」＋持続可能なまちづくり～」を実施した（國學院大學ＨＰにＹｏｕＴｕｂｅ動画で公開。再生件数1127回、令和６年５月末日現在）。第１回「しぶカフェ」では、シブサスの活動概要を紹介したが、第２回「しぶカフェ」では、渋谷区の落書き消去活動に従事するシブサスのメンバー・傍嶋賢氏（アーティスト、一般社団法人ＣＬＥＡＮ＆ＡＲＴ代表理事）の活動に焦点を当て、古沢広祐氏（本機構客員教授）、松嶋範行氏（シブサスリーダー）との対談を中心に、渋谷区環境整備課きれいなまちづくり係の係長、第七回渋谷区長への施策提言コンペ区長賞受賞者（國學院大學学生。コンペを担当したエクステンション事業課の協力による招聘）のコメントも交え、渋谷区における環境問題、ＳＤＧｓへの取組み、「持続可能なまちづくり」についての対話が繰り広げられた。なお、本講座の記録は令和６年度の刊行物に掲載予定である。

（４）成果公開

本事業の成果（①～⑤）については、令和４年度に実施したオムニバス授業「共存・共生の思想（持続可能な社会を目指して）」、「第一回「しぶカフェ」シブサス～東京渋谷で進む環境にやさしいまちづくり～」の記録を編集し、『研究開発推進センター研究紀要』第18号に掲載するとともに、成果論文を『研究開発推進機構紀要』第16号などに公開した。また、本事業で実施した第一回「しぶカフェ」のYouTube動画（再生件数1457回、令和６年５月末日現在）については、関連授業の参考動画として活用し、学部教育に還元している。

令和５年度研究事業成果報告　研究開発推進センター

國學院大學「古典文化学」の創出研究事業

渡邉　卓

一、研究事業の概要

本事業は、國學院大學が平成28年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」（タイプＢ：世界展開型）として選定された「「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―」研究事業を継承するもので、令和３年度研究事業「神道と日本文化の創造的「古典学」―令和の新しき国学研究―基盤整備事業」の後継事業にあたる。本事業では、「国学」に由来する本学の「古典」研究をより一層、発展させることを目的とし、中期５ヵ年計画に基づき５年間にわたり以下の事業を推進していくものである。

①国際シンポジウム・ワークショップ等の開催

②『古事記』・『万葉集』の文献学的研究

③「国学」的「古典」研究の再検討

④研究成果の教育還元

⑤「古典学総合データベース」の構築

⑥研究成果の社会発信

本年度実施した、それぞれの事業内容の詳細は、次の通りである。

二、令和５年度の研究事業成果

①国際シンポジウム・ワークショップ等の開催

令和５年12月１日に、研究開発推進機構と中国・南開大学外国語学院との協定に基づいて、「国際研究フォーラム」を開催した。本学からは、笹生衛（研究開発推進機構長・神道文化学部教授）による「東アジアの交流・交易と日本の神観の変遷―認知宗教学の視点で考えた宗像三女神の神観を中心に―」、西岡和彦（神道文化学部教授）の「神儒兼学と和魂漢才」、また南開大学外国語学院からは、王凱（副院長）の「科研からみる中国の日本研究」といった、東アジア的視点から日中の文化・学問交流を中心とした報告が行われた。

令和６年２月21日には、九州地方の神話・伝承をテーマとした「研究フォーラム」を開催した。吉田扶希子（共同研究員）から「北部九州の神功皇后信仰」という題で、皇后と関わりをもつ土地の伝承や文献で記される妊婦としての皇后像など、様々な神功皇后の信仰について講演された。

このほか、次年度の講演会開催に向けて、福岡県（英彦山神宮）に出張し、関係者と打ち合わせをした。

②『古事記』・『万葉集』の文献学的研究

「古事記学」事業より継続して刊行している「「古事記」注釈」の作成や記紀万葉の研究のため、定例研究会を開催した。本年度はＺｏｏｍ（オンライン）にて３回開催し、谷口雅博（文学部教授）・小野諒巳（客員研究員）より古事記注釈（三九）「葦原中国平定（四）」から（四十）「葦原中国平定（五）」についての本文校訂・訓読文・語釈などについて発表された。第３回には、城所喬男（共同研究員）より、「十八世紀における神代紀解釈―吉見幸和『神代直説』と垂加神道―」という題で、国学的視点から18世紀の日本書紀の研究について発表された。

また、本事業ホームページで公開している古事記研究データベースの補填・更新も行った。本データベースは、『古事記』に記される神名・氏族・地名など各種の最新の研究成果をインターネット上で閲覧できるようにし、多くの方にとって『古事記』をより深く理解できる手引きとなるよう作成したものである。令和５年度は神名データベースが完成。全338件の神名を公開した。また地名データベースの作成・更新も進め、総数91件の地名を公開した。

このほか、創立140周年記念事業で実施する万葉集全注釈である『萬葉集正義』の出版事業をマネジメントした。

③「国学」的「古典」研究の再検討

「国学」の現代的意義を考える研究として、賀茂真淵『万葉新採百首解』（京坂二書肆版）上中巻の翻刻を本事業ホームページにて公開した。この翻刻は、既に活字化されている嘉永四年板本や諸写本と校勘し、京阪二書肆本の記述の特徴を整理するために行ったものである。下巻は令和６年度に公開予定。

また、令和４年度より継続して、本学所蔵「井上氏旧蔵資料」（井上頼圀―頼文―頼寿三代の資料群）を整理し、簡易目録の作成を進めた。同資料群は、皇典講究所の創設に深く関わった井上頼圀、神宮皇學館の教授をつとめた頼文、近畿地方の民俗を調査した頼寿の三代にわたるコレクションである。令和５年度には、約2500点の目録情報を入力した。

④研究成果の教育還元

若手研究者の育成を図る一環として、本事業に関わる研究成果を専任・兼担教員の担当科目に還元した。

⑤「古典学総合データベース」の構築

令和４年度にＰＤＦ公開をしていた「古事記系図」を改修し、令和５年度には「古事記系図ビューワー」を公開した。本ビューワーは『古事記』上巻から下巻までに記載される神と天皇の系図を１枚にまとめ、ウェブ上で閲覧・操作できるようにし、検索や上中下巻の部分表示、神名・人名の読みや古事記中での登場箇所、また関連する各データベースの項目へのリンクなどの機能をつけ、利便性を向上させたものである。データベースと合わせてご活用願いたい。

⑥研究成果の社会発信

②の定例研究会で検討・議論した研究成果『古事記』注釈及び同注釈の英訳は、『國學院大學研究開発推進機構紀要』16号（令和６年３月）に掲載した。また各種データベースの成果は「古典文化学」事業ホームページで公開している。

令和５年度研究事業成果報告　國學院大學博物館

國學院大學博物館事業

深澤太郎・佐々木理良・尾上周平

一、研究事業の概要

当館は、博物館法に準拠した博物館指定施設であり、日本文化の講究に必要な文化財を収集・保存して教育参考に供し、学術的な研究成果を広く社会一般に公開・発信することを目的とする機関である。

（1）展示公開

校史・考古・神道の常設展示と、時宜に適ったテーマによる機動的な特集展示、そして複数年度に亙る研究の成果公開となる特別展・企画展を実施。併せて、図録などの編集・出版も行う。

（2）教育普及・情報発信

オンラインミュージアム等で展示解説を公開するほか、各種イベントを実施。また、デジタルミュージアム（ＤＭ）運営のハブとなり、外部データベースとの連携を含めて国際的に情報発信する。

（3）環境整備・営繕

博物館における収蔵・展示空間の空気質・温湿度を観測・管理すると共に、総合的有害生物管理（ＩＰＭ）を実施し、当館の収蔵資料・展示資料や、外部から借用する資料を適切に保護する。

（4）運営支援

展示等に合わせ、ＳＮＳを活用して効果的に情報を発信。また、ミュージアムショップにおいて関連書籍・グッズなどを選定・販売し、展示をきっかけとして来館者の学びを深める機会を提供する。

二、令和５年度の研究事業成果

（1）展示公開　※詳細は表１参照

当館の展示は、機構内機関研究成果公開展示、図書館・学部・大学院連携展示、外部機関連携展示、博物館学・考古学実習関連展示などからなり、教育参考・研究公開・社会貢献を企図する。来館者数は、昨年度比156％の57,214名。

特別展・企画展　春の特別列品「土御門家がみた宇宙」（４月１日開幕）、企画展「祓」（５月20日開幕）、企画展「論語for Beginners」（７月15日開幕）、特別展「三嶋の神のモノガタリ」（９月23日開幕）、企画展「マラッカを越えて極東アジアへ」（11月25日開幕）、企画展「榧園好古図譜」（２月17日開幕）の６件。

特集展示ほか「平安朝和歌への誘い」、「垂加神道の展開」、関東大震災百年・折口信夫没後70年「蝋燭と流言の夜―折口信夫が見た関東大震災」、「近代刀剣学序説―『山姥切國廣』発見の頃」、大学院博物館学専門実習展示・博物館創立95周年「見はるかす95年」、「桑名宗社伝来―双子の宝刀『村正』」、「アイヌ民族の交易と工芸」、「和の装い―神職装束とお雛さま」、西南学院大学博物館相互貸借特集展示「創られたキリシタン像」、同「エチオピアにおける祈りのかたち」、賀茂競馬930年記念事業展示の11件。

この内、特別展「三嶋の神のモノガタリ」は、当館と（一社）美しい伊豆創造センターとの協定に基づく事業であり、伊豆半島・諸島の自治体・神社の協力も得て開催。同協定は、令和６年度から大学全体を対象としたものに拡大して継続する。大学間、および博物館間の研究協定に基づく西南学院大学博物館との相互貸借特集展示も再開し、当館からは「近代刀剣学序説」を出陳した。「アイヌ民族の交易と工芸」は、国立アイヌ博物館を中心とした「アイヌ文化でつながる博物館等ネットワーク（プンカラ）」会員館として実施したもの。

（2）教育普及・情報発信

特別展・企画展に合わせて八本の動画を作成し、YouTubeチャンネル「國學院大學博物館 Online Museum」にて公開した。年度末のチャンネル登録者数は、令和４年度末比4062人増の9517人。また、企画展「祓」に関連して、国際的オンライン教育プラットフォームであるJV-Campusに提供する動画「お祓いと神道」を制作。加えて、本学放送研究会の協力により、スマートフォンを利用して博物館の展示解説などを楽しめる無料ガイドアプリ「ポケット学芸員」を導入した。

各種イベントとしては、令和５年７月に東急プラザ渋谷を会場として「日本の夏に出会う」展を出陳。併せて、雅楽サークルである青葉雅楽会の協力による「夏の雅楽―星詠みの調べ」を開催した。特集展示「和の装い」の関連行事としたワークショップ「博物館で狩衣を着る」（本学学生限定）も好評であり、装束着装イベントに対する需要の高まりが窺われる。その他、ＣＯＭＩＣ（産業文化博物館コンソーシアム）による見学会にも対応。

ＤＭは、学術資料・学術情報のデジタル化と、ジャパンサーチ等での公開を進め、ＩＩＩＦなども活用。今期は、ジャパンサーチに「収蔵資料総目録（考古）」を公開。年度末には、ＤＭの新データベース「『延喜式』祭祀関連条文集成」をアップした。

（3）環境整備・営繕

夏・冬の燻蒸と、担当学芸員による常時のＩＰＭを行っている。春夏に文化財害虫などの増加傾向が見られるが、管理エリアへの侵入防止・駆除対策を徹底。博物館会議・企画検討会で観測結果を共有し、都度改善点などを検討してきた。但し、殺虫・殺黴材のエキヒュームＳの生産終了が発表されたため、令和７年度以降の燻蒸計画が立てられておらず、代替措置の立案が喫緊の課題となろう。

（4）運営支援

ＳＮＳを用いた情報発信にも力を入れ、Ｘ（旧Twitter）のフォロワーは、令和４年度末比約５千人増加の約１万５千人。ミュージアムショップの運営も順調であり、来館者のニーズに応える運営が好評を博している。

表１　令和５年度　展示公開詳細

展示（会期）		関連事業	
特別展	三嶋の神のモノガタリ －焼き出された伊豆の島々－ （R5.9/23～11/19）	オンライン ミュージアム	10/14 吉永博彰（本学助教）「特別展「三嶋の神のモノガタリ－焼き出された伊豆の島々－」を展示解説！」、11/1 三橋健（本学客員教授）「『三嶋大明神縁起』をカタる」
		対面	【トークセッション】10/9「伊豆の神々と火山を語る」※HCD連携イベント 笹生衛（当館館長）・内川隆志（当館副館長）・深澤太郎（本学教授）・吉永博彰（本学助教）
企画展	土御門家がみた宇宙 －江戸時代の天文観測－ （R5.4/1～5/14）	オンライン ミュージアム	4/22「春の特別列品「土御門家がみた宇宙－江戸時代の天文観測」ご紹介☆彡」
	祓－儀礼と思想－ （R5.5/20～7/9）	オンライン ミュージアム	6/17 笹生衛（当館館長）・吉永博彰（本学助教）「企画展「祓－儀礼と思想－」を展示解説！」
	論語for Beginners －『論語』と格闘した江戸時代－ （R5.7/15～9/18）	オンライン ミュージアム	8/5 石本道明（本学教授）・青木洋司（本学准教授）・西岡和彦（本学教授）「企画展「論語 for Beginners－『論語』と格闘した江戸時代－」を展示解説！」
	マラッカを越えて極東アジアへ －ポルトガル地図学の16世紀－ （R5.11/25～R6.2/12）	オンライン ミュージアム	12/23 吉田敏弘（本学教授）・関良子（本学特別研究生）「【簡易版】企画展「マラッカを越えて極東アジアへ－ポルトガル地図学の16世紀－」解説」
		対面	【コンサート】12/1「16世紀ヨーロッパ音楽の コンサート “Bom vento ～夢と憧れをのせて～”」
	榧園好古図譜 －北武蔵の名家・根岸家の古物（たから）－ （R6.2/17～4/14）	オンライン ミュージアム	3/9 内川隆志（当館副館長）「北武蔵の名家・根岸家のたから」
		対面	【ミュージアムトーク】2/24 内川隆志（当館副館長）、3/9 三浦泰之（北海道博物館研究部学芸主幹）
特集展示・記念展示	平安朝和歌への誘い（共催：中古文学会）【ホール】（R5.5/20～6/18）		
	垂加神道の展開－儒学・神道と格闘した人々－【神道展示室】（R5.7/15～9/18）		
	折口信夫が見た関東大震災【校史展示室】（R5.9/23～11/19）		
	賀茂別雷神社　賀茂競馬九三〇年記念事業展示２回【神道展示室】（R5.4/1～5/14・9/23～11/19）		
	近代刀剣学序説－「山姥切國廣」発見の頃－【考古展示室】（R5.10/5～11/9）		
	西南学院大学博物館相互貸借特集展示：創られたキリシタン像－資料からみるキリシタンへのまなざし－【考古展示室】（R5.11/10～R6.2/18）		
	大学院博物館学専門実習展示：見はるかす95年－発展する研究拠点－【校史展示室】（R5.11/25～R6.2/12）		
	桑名宗社伝来 －双子の宝刀「村正」－【神道展示室】（R5.11/25～R6.4/14）		
	アイヌ民族の交易と工芸【ホール】（R6.2/17～2/12）		
	和の装い－神職装束とお雛さま【神道展示】（R6.2/17～3/17）		
	西西南学院大学博物館相互貸借特集展示：エチオピアにおける祈りのかたち【考古展示室】（R6.2/20～5/12）		

表２ 令和５年度入館者数

月	人数（名）
４月	5,044
５月	7,265
６月	7,248
７月	5,982
８月	6,318
９月	2,886
10月	5,182
11月	4,395
12月	3,685
１月	2,734
２月	3,089
３月	3,386
合計	57,214

４年ぶりの対面開催となったトークイベント：特別展「三嶋の神のモノガタリ」（HCDとも連携）

調査研究―学術資料センター（考古学資料館部門）　國學院大學・白河市共同事業

福島県白河市　建鉾山遺跡　3次元測量調査概報

深澤太郎・小槻賢志・篠田浩輔

一、調査に至る経緯

神道考古学の課題　本学では、「神道考古学」を唱えた大場磐雄以来、倭国の国家形成と軌を一にして生まれた「神道」の展開過程を探求し、今日に至る日本宗教史・神道史を詳らかにするための考古学的研究を重ねてきた。しかし、非創唱宗教である「神道」の原型を捉えることは容易でなく、その淵源を窺い知るには、律令期に整備された神祇祭祀の体系を範として時代遡及的な検討を試み、かつ連綿と祭祀が継承されてきた神社境内遺跡の変容過程を追及してゆく必要があろう。

建鉾山遺跡に関する既往の調査　このような問題意識の下、学術資料センター考古学資料館部門では、「神社境内祭祀遺跡の研究」を推進している。対象遺跡の一つである福島県白河市建鉾山遺跡は、阿武隈考古館長であった首藤保之助が発見し、本学の大場磐雄が祭祀遺跡と認めた古墳時代中期の事例。麓から山頂まで約100ｍの建鉾山（高野峯山）は、円錐形の秀麗な山容を呈しており、ケヌ（ケノ）・ヒタチからミチノオクへ至る阿武隈川流域の要衝に位置したランドマークでもある。

亀井正道らによる昭和33（1958）年の調査では、式内社・馬場都都古和氣神社の旧社地とされ、往古より「御宝前」と呼ばれてきた建鉾山北山腹の「高木地区（建鉾山祭祀遺跡）」における磐座群周辺から、小型鏡・鉄製品・石製模造品・土師器などが出土。西に建鉾山を望む「三森地区（三森遺跡）」でも、石製模造品・土師器が出土し、後に戸田有二らが実施した調査では、方形の溝・柵列で区画された居館・祭祀空間なども確認された。

二、調査の目的と経過

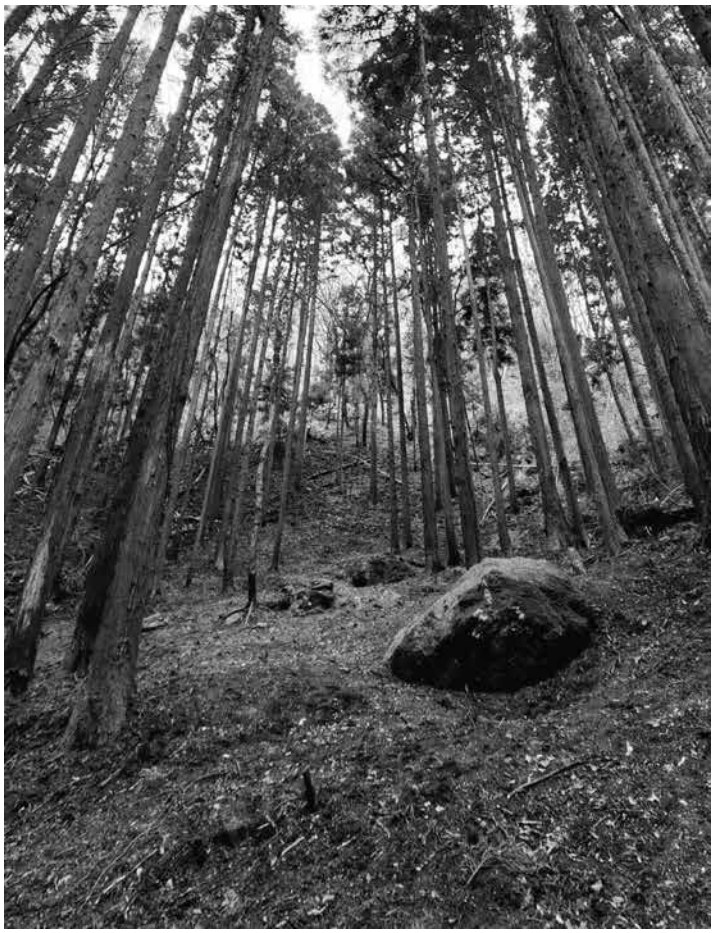
調査の目的　当部門では、國學院大學博物館が所蔵する昭和33年調査の出土資料と、大場磐雄資料に含まれる写真資料などを総合的に再検討しており、報告書『建鉾山』掲載資料の存否確認や、調査区毎の出土遺物重量計測を進めている。今後は、石製模造品・土師器などを個別に分析し、遺跡全体の実像を明らかにしてゆく必要があろう。しかし原報告では、調査区配置図の等高線に標高値が記入されておらず、遺物出土状況の厳密な復元が難しい憾みがあった。そこで、博物館収蔵資料の再整理に併せて、建鉾山遺跡「高木地区」の再測量を行うことに決したのである。

かかる資料整理・測量調査は、文化財専門研究員の鈴木功氏をはじめ、白河市による全面的な協力の下、将来的な史跡整備を視野に入れた共同事業として実施する計画となった。また、石製模造品などの調査研究に際しては、郡山市の佐久間正明氏からも協力を頂いている。調査機材に関しては、（株）島田組による支援を得た。

調査の経過　令和5（2023）年3月の予備調査は、深澤太郎を担当者として、小槻賢志・篠田浩輔（当時大学院文学研究科博士課程前期）が参加。本調査に向けて、遺跡附近に座標を移動し、試験的な3次元レーザー測量と、ＳｆＭ測量を行った。令和6（2024）年3月の本調査は、深澤、小槻、篠田（府中市教委）に加え、池田榮史、内川隆志も参加。白河市側に草木・倒木の事前処理を担当して頂いたお陰で、順調に測量を遂行し、地元保管資料の観察や、市内国指定史跡の巡検なども含む総合調査となった。

三、測量調査の成果

今般、高木地区周辺の伐採を行った上で測量調査を行った結果、現地の位置・地形が明確となった。高木地区は、建鉾山北面の尾根筋に挟まれた標高約348ｍ～353ｍの地点にあり、山頂の建鉾岩から麓までの間では、最も傾斜が緩い一帯に位置する。谷状の地形に転落した岩石群が、ここに留まった結果、磐座と認識されるようになり、祭祀に供された道具類を納める場となったのであろう。旧調査区の厳密な位置も判明し、出土遺物の位置付けや、現地の整備に向けた詳しい状況も把握し得た。詳細は、今年度末刊行の『國學院大學博物館研究報告』第41輯に掲載の予定である。



情報発信―研究開発推進機構　デジタルミュージアム

デジタルミュージアムの現状と課題

及川　聡

一、経緯と背景

デジタルミュージアムの展開　本学は、その長い歴史の中で、考古・神道・典籍等の膨大な学術資料を収集し、研究教育に活用してきた。これらの資料は、やはり直接、現物を見て頂くことに勝るものはないが、そのような機会は物理的制約から限定的にならざるを得ない。当機構には、このような学術資料をデジタル化してインターネットに公開するデジタルミュージアム（DM）があり、これまでに約8万件のメタ情報を画像付きで公開している。また、国が運用しているジャパンサーチ（JPS）には、約1300件の資料を連携公開させている。

旧日文研以来のDMの来歴　学術資料・研究成果データがDMの公開コンテンツとして結実するまでにいくつかの転機・道のりがあった。文科省の支援を受けた旧日本文化研究所の学術フロンティア事業（1999～2003年度）を皮切りに、COEプログラム（2002年度～2006年度）によるデータ整備事業が始まり、「オープン・リサーチ・センター整備事業」（2007年度～2011年度）を機に、研究開発推進機構が組織され、研究事業推進、図書館、展示公開等の学術研究機能を網羅する施設―学術メディアセンターが新設された。考古・民俗等のデータの整備も進み、インターネット時代への対応として、同機構の機関となった日本文化研究所が中心となってDM構築を主導し、学術デジタルコンテンツの公開機能として実らせた。この第1期DMは横断検索や多言語化もなされ、海外や幅広い分野から多くのアクセスを呼び込み、人文科学研究において大きな役割を果たした。

デジタル公開の一般化・国際化　一方、システムそのものはその当時、本学の要求仕様を満足させるパッケージがなかったため、カスタマイズを重ねざるをえず、費用と機能性はITの進化とともに乖離するものになっていった。また、国のデジタル推進方針は、最新の技術で実現されたJPSとして形となったことで、各研究機関は、JPSとの連携を念頭に、利用条件、情報の標準語彙との整合性、共通項目の標準化等の検討が必要になった。特に、JPSは2次利用の条件を付して簡便な手続きで利活用されるよう推奨し、検索での発見可能性を高めるため、メタ情報整備の重要性を強調する。IIIF（トリプルアイエフ）は国・機関を跨いで画像を利用し合える国際的技術だが、JPSも採用し浸透が進んでいる。本学においても、いかに地球規模で学術データ公開の理念を考えられるかによって、ステークホルダーである学生・保護者に対する説明責任、学術研究に対する社会的貢献、本学と外部との研究交流から得られる教育研究活動に果たす重みが変わってくる。

二、現状と課題

進捗状況　2021年1月、第2期DM稼働以降は、博物館がDMを管理している。2014年の文化庁助成事業を機に、博物館が新しい運営体制になり、以降、展示事業と学術資料の管理が不可分になったことで、学術資料のデジタルコンテンツが博物館にシフトするのはごく自然な流れであった。

新体制では、前項の環境変化や背景を受け、デジタルコンテンツの利用促進が重点化された。最も象徴的な変更は、一部を除き利用条件を遵守することを条件に自由にダウンロードして2次利用できるようにしている点である。利用条件ではクリエイティブコモンズライセンスに基づいた利用とクレジット明記の厳守を求めている。また、フォームから利用目的や利用コンテンツ等を回答してもらい利用情報として収集している。これにより当該データベースでは手続きが省略され、利活用促進の効果がさらに期待できる仕組みになった。

搭載データベースも年々、増加しており、令和5年度から令和6年度年度にかけて新たに、「『延喜式』祭祀関連条文集成」「所蔵古文書データベース」「延喜式内社データベース」「祭祀遺跡データベース」が搭載された。今後も、未搭載の有用なデジタルコンテンツを各機関と連携しながら公開を進める。

JPSは2つのデータベースの公開後、新規搭載は進んでいないが、JPSのIIIF生成機能を活用し、今年度の企画展でIIIFによる新たなデジタルコンテンツの見せ方と研究成果の公開を予定する。展示観覧サービスではDMを活用した解説ガイド音声サービスを昨年度リリースしDMの発展的活用が進んだ。また、利用面の標準化を図るべく、検索結果一覧に表示する共通項目をJPSとDMで可能な範囲で一致させた。JPSの共通項目はeuropeanaを範としているため、本学DMも国際標準に則った形式に近似したと言える。

共通理念と課題　コンテンツとしては国の宝ともいえる貴重資料を多数収蔵する本学図書館との一層の連携は最重要課題である。これらは図書館デジタルライブラリー（DL）で公開されているが、検索機能を有するDMと統合されれば利活用度がさらに向上されるだろう。

DMに必要な人材は、研究の現場で緻密に整備されたデータをデータベース仕様に整えるための調整力、データとシステムをハンドリングするための技術力、デジタル推進の方向性を検知する力なども問われる。そもそも本学はDM運用スタッフの絶対数が少ない現状がある。大学として学術資産デジタルコンテンツにかかる新たな理念を構築した上で、そこに必要な組織と人材を再構成すべき時期が既に到来していることを認識しなければならない。

彙報

会議

■全体
・令和5年度第5回運営委員会、令和6年2月8日（木）、若木タワー地下1階会議室02
・令和6年度臨時運営委員会、令和6年6月4日（火）、メール審議
・令和6年度第1回運営委員会、令和6年5月9日（木）、若木タワー地下1階会議室02
・令和5年度第6回企画委員会、令和6年3月6日（水）、AMC棟5階会議室06
・令和6年度第1回企画委員会、令和6年4月17日（水）、AMC棟5階会議室06
・令和5年度第6回人事委員会、令和6年2月6日（火）、メール審議
・令和6年度第1回人事委員会、令和6年5月8日（水）、AMC棟5階会議室06
・令和6年度第1回教員等資格審査委員会、令和6年5月8日（水）、AMC棟5階会議室06

■日本文化研究所
・令和5年度第6回所員会議、令和6年2月28日（水）、オンライン会議
・令和6年度第1回所員会議、令和6年4月15日（月）、オンライン会議

■学術資料センター
・令和6年度第1回学術資料センター会議、令和6年4月24日（水）、メール審議

■校史・学術資産研究センター
・令和6年度第1回校史・学術資産研究センター会議、令和6年4月27日（土）、オンライン会議

■研究開発推進センター
・令和6年度第1回研究開発推進センター会議、令和6年4月27日（土）、オンライン会議

公開講座

■研究開発推進センター
・令和5年度「古典文化学」研究フォーラム、令和6年2月21日（水）15：00～16：30（ハイブリッド開催）、120周年記念2号館2101教室、講師＝吉田扶希子（西南学院大学非常勤講師・本学研究開発推進機構共同研究員）「北部九州の神功皇后信仰」
・第2回「しぶカフェ」（共生社会×渋谷カフェ）「渋谷の落書きとアートのあいだ ―「仕事」＋持続可能なまちづくり―」、令和6年3月11日（月）～、オンライン配信、講師＝松嶋範行（シブヤサステナブル推進協議会リーダー）「シブサス」がつなぐもの」、傍嶋賢（一般社団法人CLEAN&ART代表理事）「渋谷の落書きとアートのあいだ」、トークセッション＝古沢広祐（國學院大學研究開発推進機構客員教授）・松嶋範行・傍嶋賢「～「仕事」とサステナブルな活動を両立する魅力～」、コメント1＝清水裕樹（渋谷区環境政策部環境整備課きれいなまちづくり係長）、コメント2＝清水元葵・三浦夕佳・森下陽向・小松遥（本学学生・第7回渋谷区長への施策提言コンペ区長賞受賞者）

出張

■学術資料センター
・内川隆志・池田榮史・深澤太郎・篠田浩輔・小槻賢志、「福島県白河市建鉾山測量調査」のため、令和6年3月21日（木）～3月23日（土）、福島県白河市

■研究開発推進センター
・渡邉卓、「次年度シンポジウムの打合せならびに会場視察」のため、令和6年2月5日（月）～2月7日（水）、福岡県田川郡添田町、朝倉市、遠賀郡芦屋町
・松本久史・渡邉卓・半田竜介、「研究協力の企画・立案に向けた皇學館大学との打合せ」のため、令和6年3月10日（日）～3月11日（月）、三重県伊勢市

■國學院大學博物館
・内川隆志、「企画展「榧園好古図譜」に係る弘前大学所蔵資料の返却」のため、令和6年4月24日（水）～4月25日（木）、青森県弘前市
・池田榮史・深澤太郎、「モンゴル襲来展（仮称）に係る資料調査と西南学院大学博物館相互貸借特集展示」のため、令和6年6月10日（月）～令和6年6月12日（水）、長崎県松浦市、平戸市、熊本県菊池市、福岡県糸島市、福岡市

刊行物

■全体
・研究開発推進機構『機構ニュース』通号34（令和6年2月25日発行）
・研究開発推進機構『國學院大學研究開発推進機構紀要』第16号（令和6年3月31日発行）

■日本文化研究所
・日本文化研究所『2022年度国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」報告書』（令和6年2月29日発行）

■学術資料センター
・学術資料センター『祭具―神社の祭祀を読み解く―』（令和6年2月29日発行）

■校史・学術資産研究センター
・校史・学術資産研究センター『校史・学術資産研究』第16号（令和6年3月6日発行）

■研究開発推進センター
・校史・学術資産研究センター『校史』第34号（令和6年3月6日発行）

■研究開発推進センター
・研究開発推進センター『研究開発推進センター研究紀要』第18号（令和6年3月10日発行）

■國學院大學博物館
・國學院大學博物館『國學院大學博物館研究報告』第40輯（令和6年2月29日発行）

令和６年度　　國學院大學 研究開発推進機構　事業計画及び人事一覧（事業別）

＊研究事業代表者　　令和６年６月１日現在

機関	研究事業名	専任教員	兼担教員	客員研究員	ポスドク研究員	研究補助員	客員教授	共同研究員
日本文化研究所	宗教文化研究と学術情報発信の推進（R６～８年度）	※ 星野靖二 吉永博彰 川嶋麗華	飯倉義之 遠藤　潤 黒﨑浩行 平藤喜久子 松本久史 ｼｯｹﾀﾝﾂ・ｴﾘｯｸ	髙田　彩	大場あや 木村悠之介 武井謙悟 藤井修平	長見菜子 鳴海あかり 牧田小有玲	井上順孝 櫻井義秀 ﾅｶｲ・ｹｲﾄ 林　淳 ﾍｲｳﾞｨﾝｽﾞ・ﾉﾙﾏﾝ 山中　弘	天田顕徳　塚田穂高 一戸　渉　問芝志保 今井功一　丹羽宣子 今井信治　野口生也 ｴｰﾆﾙｽ・ﾗｰｼｮﾝ　原田雄斗 荻原　稔　ﾋｭﾃﾙ・ｼｬﾝﾐｼｪﾙ 小田真裕　ﾌﾚｰﾚ・ｶｰﾙ 小平美香　牧野元紀 小高絢子　三ツ松誠 ｶｲﾀﾆﾃｨｽ・ﾔﾆｽ　宮澤安紀 齋藤公太　村上　晶 芹口真結子　矢崎早枝子
学術資料センター	学術資料センター（考古学資料館部門）事業	池田榮史 深澤太郎	青木　敬 ※ 内川隆志 黒﨑浩行 笹生　衛 谷口康浩 服部比呂美 吉田敏弘 松本耕作	阿部常樹 鳥越多工摩		青木　龍 大山晋吾 吉澤　徹		石井　匠　大工原豊 石川岳彦　田口哲也 井本悠紀　土屋健作 植田　真　ﾊﾞｳｼｭ・ｲﾛｰﾅ 尾上周平　平本謙一郎 加藤元康　二木泰史 菊地大樹　壬生友子 楠恵美子　山口　晃 栗木　崇　渡辺夏海 惟村忠志
	学術資料センター（神道資料館部門）事業	大東敬明 吉永博彰 木村大樹	加瀬直弥 ※ 笹生　衛 鈴木聡子			髙橋あかね	伊藤　聡 岡田莊司	塩川哲朗 水谷　類
校史・学術資産研究センター	校史・学術資産研究センター事業	大東敬明 宮本誉士 渡邉　卓 比企貴之	加瀬直弥 野中哲照 藤田大誠 ※ 松本久史 矢部健太郎 荒木優也 手塚雄太	髙橋俊之 髙見澤美紀	齊藤みのり		根岸茂夫	遠藤珠紀 金子　拓 髙野裕基 松本博明
研究開発推進センター	研究開発推進センター研究事業「神道・日本文化の先端的研究」	大東敬明 宮本誉士 新井大祐 吉永博彰 木村大樹 半田竜介	太田直之 加瀬直弥 藤田大誠 ※ 松本久史		入倉滉太			大貫大樹　武田幸也 河村忠伸　戸浪裕之 黒岩昭彦　中野裕三 小林威朗　野田安平 坂井久能　宮澤佳廣 佐藤一伯　森　悟朗 高原光啓　吉田扶希子
	「〈SDGs〉と建学の精神」研究事業（R４～８年度）	星野靖二 宮本誉士 新井大祐	苅田真司 菅　浩二 藤本頼生 ※ 松本久史 手塚雄太		髙橋亮一	篠原大輝 山口順平	上山和雄 古沢広祐	今泉宜子　吉田律人 康　成文　吉野　裕 髙久　舞 西俣先子 冬月　律
	國學院大學「古典文化学」の創出研究事業（R４～８年度）	渡邉　卓 半田竜介	上野　誠 大石泰夫 ※ 谷口雅博 土佐秀里 西岡和彦 松本久史 荒木優也	鶉橋辰成 小野諒巳 ｷﾛｽ・ｲｸﾞﾅｼｵ	鈴木健多郎 中山陽介		辰巳正明	大谷　歩 大沼宜規 城所喬男 倉住　薫 神宮咲希 鈴木道代 曹　咏梅
國學院大學博物館	國學院大學博物館事業	池田榮史 大東敬明 深澤太郎 渡邉　卓 吉永博彰	内川隆志 ※ 笹生　衛			糸数栞菜	金子皓彦 小林達雄 朱　岩石 椙山林繼 福尾正彦 古谷　毅 三橋　健 茂木雅博 柳田康雄	大日方一郎 粕谷　崇 田中　潤 中村　大 中村耕作

令和６年度　國學院大學 研究開発推進機構 人事一覧

令和６年６月１日現在

機構長		笹生　衛
日本文化研究所長		平藤喜久子
学術資料センター長		内川隆志
校史・学術資産研究センター長		松本久史
研究開発推進センター長		松本久史
國學院大學博物館長		笹生　衛
國學院大學博物館副館長		内川隆志　及川　聡
専任教員	教授	池田榮史　大東敬明　深澤太郎　星野靖二　宮本誉士
	特別招聘教授	サンド・ジョルダン
	准教授	新井大祐　齊藤智朗　渡邉　卓
	助教	吉永博彰
	助教（特別専任）	川嶋麗華　木村大樹　半田竜介　比企貴之
兼担教員	教授	青木　敬　飯倉義之　上野　誠　内川隆志　遠藤　潤　大石泰夫　太田直之　加瀬直弥　苅田真司 黒﨑浩行　笹生　衛　菅　浩二　谷口雅博　谷口康浩　土佐秀里　西岡和彦　野中哲照　服部比呂美 平藤喜久子　藤田大誠　藤本頼生　松本久史　矢部健太郎　吉田敏弘
	准教授	荒木優也　シッケタンツ・エリック　鈴木聡子　手塚雄太
	助手	松本耕作
研究員	客員研究員	阿部常樹　鶉橋辰成　小野諒巳　キロス・イグナシオ　髙田　彩　髙橋俊之　髙見澤美紀　鳥越多工摩
	ポスドク研究員	入倉滉太　大場あや　木村悠之介　齊藤みのり　鈴木健多郎　髙橋亮一　武井謙悟　中山陽介　藤井修平
	研究補助員	青木　龍　糸数栞菜　大山晋吾　篠原大輝　髙橋あかね　長見菜子　鳴海あかり　牧田小有玲　山口順平 吉澤　徹
客員教授		伊藤　聡　井上順孝　上山和雄　岡田莊司　金子皓彦　小林達雄　櫻井義秀　朱　岩石　椙山林繼 辰巳正明　ナカイ・ケイト　根岸茂夫　林　淳　福尾正彦　古沢広祐　古谷　毅 ヘィヴンズ・ノルマン　三橋　健　茂木雅博　柳田康雄　山中　弘
共同研究員		天田顕徳　石井　匠　石川岳彦　一戸　渉　今井功一　今井信治　今泉宜子　井本悠紀　植田　真 エーニルス・ラーション　遠藤珠紀　大谷　歩　大貫大樹　大沼宜規　荻原　稔　小田真裕　小平美香 小高絢子　尾上周平　大日方一郎　ガイタニディス・ヤニス　粕谷　崇　加藤元康　金子　拓　河村忠伸 菊地大樹　城所喬男　楠惠美子　倉住　薫　栗木　崇　黒岩昭彦　康　成文　小林威朗　惟村忠志 齋藤公太　坂井久能　佐藤一伯　塩川哲朗　神宮咲希　鈴木道代　芹口真結子　曹　咏梅　大工原豊 髙野裕基　高原光啓　髙久　舞　田口哲也　武田幸也　田中　潤　塚田穂高　土屋健作　問芝志保 戸浪裕之　中野裕三　中村　大　中村耕作　西俣先子　丹羽宣子　野口生也　野田安平 バウシュ・イローナ　原田雄斗　ビュテル・ジャン＝ミシェル　平本謙一郎　二木泰史　冬月　律 フレーレ・カール　牧野元紀　松本博明　水谷　類　三ツ松誠　壬生友子　宮澤安紀　宮澤佳廣 村上　晶　森　悟朗　矢崎早枝子　山口　晃　吉田扶希子　吉田律人　吉野　裕　渡辺夏海

令和６年度　事務局人事一覧

令和６年６月１日現在

学術メディアセンター事務部長	鵜澤英子
学術メディアセンター事務部図書館担当次長	安達　匠
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構事務課長	佐野真之
学術メディアセンター事務部	及川　聡
研究開発推進機構事務課	志水志保　鈴木一匡　宮本千夏子　相川由紀　三塚広椰 東海林由光　三島　隆
國學院大學博物館学芸員	尾上周平　佐々木理良　網谷哲成（兼務）

資料紹介

坪井洋文博士資料にみる伊豆諸島の民俗調査

川嶋麗華

坪井洋文博士資料の現況　坪井洋文博士（1929－1988）は、『イモと日本人』、『稲を選んだ日本人』等の著作で知られる民俗学者である。昭和28年（1953）に國學院大學文学部を卒業し、柳田國男が設立した民俗学研究所の研究員、本学日本文化研究所の教授等を経て、国立歴史民俗博物館教授を務めた。

坪井洋文博士の研究資料は、平成15年（2003）2月に、大友務氏・本間トシ氏の仲介により、遺族から本学折口博士記念古代研究所に寄贈され、令和4年（2022）に学術資料センター（考古学資料館部門）へ移管された。本資料には、調査カード、調査ノート、書籍、民俗写真、原稿や講演台本といった研究関連資料が幅広く含まれる。このうちネガ・スライド・アルバムといった36,000コマ超の写真資料を中心に、平成15年度の本学文学部共同研究費「坪井洋文民俗研究資料に関する研究」（小川直之・倉石忠彦）、平成16～17年度私立大学学術研究高度化推進事業「学術フロンティア推進事業」（研究代表者・杉山林継）、平成17～20年度の科学研究費・基盤研究（B）「民俗画像資料の情報化と研究活用に関する研究」（研究代表者・小川直之）で、目録化・デジタル化を進めた。学術資料センター（考古部門）への移管後、現在は総目録の作成とともに、未整理分の坪井洋文資料の目録化・デジタル化を進めている状況である。

坪井洋文と伊豆諸島民俗調査　國學院大學卒業後、坪井は本学民俗学研究会の民俗調査で新島を訪れる。本調査内容は『昭和30年度民俗採訪』（1956）に報告された。また東京都文化財調査の一環として、昭和32年（1957）に北部伊豆五島（大島、利島、新島、式根島、神津島）文化財総合調査、翌33年（1958）は八丈青ヶ島文化財総合調査が行われ、東京都立大学の岡正雄を中心とした民俗（社会）班の一員として参加した。本調査を含む伊豆諸島文化財調査の報告としては、『伊豆諸島文化財総合調査報告』全5分冊（1958－1965）が刊行された。昭和38年（1963）には大間知篤三の八丈島訪問に坪井が同行し、後に共著『八丈島』（1966）を出版した。20年後の昭和57年（1982）には三宅島を訪れ、伊豆諸島の有人である九島のうち、御蔵島を除く島々を訪問している。

民俗調査関係資料とその活用　本学で所蔵する坪井洋文博士資料には、伊豆諸島に関する写真やノートが多数含まれており、現在、八丈島・青ヶ島の写真フィルムは84本、調査ノートは計10冊が確認される。これらの資料からは、当時の民俗と民俗調査のようすが窺える。

「八丈島予備調査」ノートには、八丈青ヶ島文化財総合調査が報道発表された6月25日の日付と〈大間知篤三より〉という端書きがある。大間知は、昭和13年度（1948）に民俗学研究所が実施した海村調査で八丈島を担当し、その後も伊豆諸島の民俗研究を牽引した研究者である。ノートの同頁に「女性の名前　古い役場の戸籍簿などを見ること」といった調査方針の記述があり、その方針に従うように、「青ヶ島I」ノートには「明治九年戸籍」と「女子名」が列記されている。大間知自身は本調査団に参加していないが、調査準備の段階から関与したことが窺える。また調査の翌34年（1959）「カード払出済」とあり、当時の民俗学者らが重用したカード資料を作成したことがわかる。なお、青ヶ島の民俗情報は、調査報告書には十分に記載されず、民俗写真もごく一部が使用されたのみで、坪井の民俗調査資料には、未公開の情報が多く含まれる。

折口信夫をはじめとする著名な民俗学者が輩出し、民俗学の黎明期から、その一翼を担ってきた本学には、坪井洋文や桜井満といった研究者が残した民俗調査資料が多数、寄贈・所蔵されている。これらの民俗調査資料は、現在では得られない貴重な情報記録であると同時に、当時の民俗調査を概括的に捉えられる歴史資料でもある。本資料は、教員が担当する教育科目への還元、大学院での調査研究が徐々に進んでいるところである。

青ヶ島のメンーッとメンノメーッ

印刷　ヨシミ工産株式会社